

徒然草

セネガルの教育

— 近代ダーラ (Daara moderne) はセネガルを救えるか —

鈴木宣行
創価大学教授

筆者はセネガルの開発について考える時、教育・文化的側面は重要な要素であると考えている。2006年にセネガル初の人間国宝に指定された5名の方々¹⁾が発表された。その中のお一人が「アフリカ映画の父」と称され、パイプを口にくわえた姿で有名なセンベヌ・ウスマン氏(2007年6月9日逝去 84歳)である。筆者は2006年11月に一時、退院されていた氏に偶然に自宅(ガレ・チェド)でお会いすることができた。氏は健康に不安があったにもかかわらず、2時間近く時間を割いてくださった。その中で、氏は「日本の経済的協力・支援には本当に感謝しています。しかし、これからは教育・文化交流に力を貸していただきたいのです。それこそが今後の両国関係のキーになっていくものと確信しています」と、しっかりとした言葉で話されていた。1995年の日本大使館主催の「俳句コンクール」で審査員をしていただき、ゲストとして講評もして下さって以来、種々アドバイスをいただいていた。遺作となった作品『母たちの村』(岩波ホールで上映された)について氏から「何回見ましたか」という質問があり、筆者が「6回拝見しました」と答えると、「いや、10回は見てください。そうすると、アフリカが見えてきますよ」と、助言してくださった。この氏の言葉から「母たちの村」に対する氏の思いが如何に大きかったのかが理解できたのである。

氏は常に「文化と教育」という点について深い思いを寄せられていた。これまで何回かお会いし、お話を伺う機会があったが、多くの場合、このテーマであった。今回は氏の思いを共有するという意味から、教育、ことにコーラン学校であるDaara(以下、「ダーラ」という)を改善させるべく設置されたDaara moderne(ダーラ・モデルヌ、以下「近代ダーラ」という)について述べてみようと思う。



(カヤールのダーラ)

²⁾と述べている。つまり、ムリッドの教義が「学校」となっていると言う。ダーラは2000年頃までは、それほど「教育」という領域の中ではそれほど大きくは話題に上らなかった。しかし、政府がダーラの管理運営に関心を持つようになり始めた2003年にLe Soleil紙上で一人の宗教指導者が「ダーラは、これまで政府からの援助はもらっていない。それなのに、なぜ政府がダーラに関して口出しをするのか」との強硬な意

見を述べたことがあった。

この後、この「ダーラの変革・近代化」—これについて、第二代大統領のディウフ時代にも言われていたことはあったが、全く具体的にはならなかった—ということが政府の政策として新聞紙上で、国民の目に触れるようになってきたのである。そして、第三代大統領のウッド時代になり、2006年に同氏は二大宗派—ムリッド派とティジャーニ派—のそれぞれの本部を訪問し、この「ダーラの変革・近代化」を強力に推進していくことについて両派のトップの理解を取り付けたのである。

当時のウッド大統領が打ち出した「近代ダーラ」というのは、ハード面の強化、つまり教室建設や学校内の諸施設を改善し、学舎としての充実を図り、さらに、旧来のイスラム教並びにムリッド派の教義のみを教えるのではなく、機械工や家具職人などを養成するための職業訓練課程をも設置しようとするものであった。この近代ダーラで若者たちが手に職をつけて、独り立ちできれば、画期的なことである。なぜ筆者が「画期的なこと」という表現を用いたかということ、過去においてつぎのようなことがあったからである。2002年に筆者が国民教育省でスラン大臣（当時）とお会いした時に、筆者は「教室が全国的に不足状態にあるセネガルで、ダーラで識字教育、普通基礎教育を実施すれば、識字率の向上が実現できるのでないでしょうか」と、無礼を承知でお伺いした。その時、同大臣は「それは無理です。ダーラは宗教施設ですから」と一蹴されてしまったのである。この当時の状況から考えると、まさに「画期的」変化なのである。

さらに、この近代ダーラに関するセミナーがセネガル北部の都市サン・ルイで開催された。この「ダーラの変革・近代化に関するセミナー」には上述のスラン大臣をはじめ、15名の宗教指導者、コーラン学校教師、アラビア語教師など多数が参加し、今後の近代ダーラの在り方、そこでの新たなカリキュラムの策定、その内容、そして、徒弟制度を含めた職業訓練課程の検討など種々の課題が検討された。参加した政府関係者は聖典コーラン教育が主要なものであることに賛意を示しながら、その他の教育、フランス語、算数（計算）、職業訓練（une formation professionnelle）などの他の科目などの基本的科目も導入していきたいと述べた。一方、このセミナーでは個人所有としてのダーラ（「borom Daara」³⁾）を持つ団体のメンバーからは、サン・ルイ地域のダーラが置かれている厳しい労働条件、生活条件などについてもしっかりと支援をお願いしたいとの要望が出されたのである。このセミナーで出された意見として、セネガル人にとって、市民としてここで生活する以上は、コーラン教育、アラブ・イスラム教育は不可欠であり、それらを疎外化、差別化するということがあってはならないとしている点が注目される。この点からは普通教育、言い換えれば、ヨーロッパ的教育一辺倒はこの国に馴染まないとする宗教指導者たちの思いが垣間見えるのである。

これら宗教指導者の意見は政府としてしっかり聞き、その上で両者が合意形成を作り、

納得した形で徐々に普通教育分野の科目をも教授していけるような環境整備に努める道を進んでいくべきであろう。

以上、述べたように今まで誰も踏み込めなかったダーラの改革が牛歩の如くゆっくりとした歩みではあるが、「近代ダーラ」として進んでいく方向性が見え始めた今、センベヌ・ウスマン氏が深く思っていた識字率の向上に繋がり、近代ダーラがより多くの子供たちにとって基礎教育—それがたとえ一部の科目であったとしても—を受けられる場となり、教育の機会獲得に資するものと私は考えている。

注1) Didier Hamoneau, *Vie et Enseignement du Cheikh Ahmadou Bamba*, p. 306, Les Editions Al-Bouraq, 1998

注2) 5名のセネガルの「人間国宝」は次の方々である。

1. Sine Yandé Codou Sène 歌姫（歌手）
2. Ousmane Sembène 映画監督
3. Boubacar Joseph Ndiaye ゴレ島の「奴隷の家」管理責任者
4. Doudou Ndiaye Rose 世界的なパーカッションリスト
5. Samba Diabará Samb 著名な伝説の声の持ち主で、ハラムという伝統楽器の名手。

「この方たちはセネガル文化の最高峰にいる著名な知識人たちであり、明日のセネガルを担う若者たちに手本となる人々である。」との文化大臣コメントが発表された。

注3) borom Daara とは、いわゆる一人のマラブーが個人として所有しているダーラのことである。

ただ、表現としてはダーラ Daara には“borom Daara-bi”と“borom Daara-yi”とがあり、前者が一人のマラブーによって所有され、運営されているもので、後者は複数のマラブーによって所有され、運営されているものである。

* ウォロフ語“borom”はフランス語では“une personne à qui appartient”という意味になる。ウォロフ語では名詞の後ろに“(名詞)-bi”が付くと単数形に、“(名詞)-yi”が付くと、複数形となる。